

電車が綾瀬の駅を離れたところで、雨が降り始めた。なかば凍った雨だった。どうりで朝から左膝が痛むはずだった。

本間俊介は、先頭車両の中央のドアの脇に、右手で手すりをつかみ、左手に閉じた傘を持って立っていた。尖った傘の先端を床につき、杖の代わりにしている。そして、窓の外を眺めていた。

平日の午後三時、常磐線の車内はすいている。座ろうと思えば、空席はたくさんあった。制服姿の女子高生の二人連れと、大きなハンドバッグを抱えて居眠りをしている中年の女性、運転席に近い先頭のドアのそばで、両耳に突っ込んだイヤホンから流れ出る音楽に合わせ、リズムカルに身体を揺すっている若者——一人一人、仔細に顔を見ることが出来る程度の人数しか乗り合わせていない。別に無理をして立っている必要はなかった。

実際、座ったほうがよほど楽なのだ。午前中のうちに家を出て、理学療法をみっちり受け、そのあと捜査課に寄ってきた。その間、タクシーも使わず、徒歩と電車だけでこなした。ひどく疲れている。背中はパンパンに張って、鉄板が押し込まれたような感じだ。

捜査課では、同僚たちは出払っていたが、留守番役の係長が、死人が生き返ってきたといわんばかりに大げさな歓待をして、暗黙のうちに（早く帰れ）と促してくれた。昨年末に退

院してから、職場に顔を出すのは今日でまだ二回目だが、あの大騒ぎには何か魂胆でもあるのかもしれないと思うと、あまりいい気持ちはしない。仕事はフェアなスポーツとは違うから、ペナルティを喰って退場しているうちに、代わりの選手が現れたのではなく、ルールそのものが変わって、自分のポジションが失くなってしまふ——そんなこともあり得るだろう。休職などしないほうがよかったのかもしれないと、初めてちくりと後悔した。

たぶん、そのせいだ。こうして阿呆くさい意地を張り、車内でずっと、立っただままでいようとしているのは。誰が見ているわけでもないのに。いや、誰が見ているわけでもないから。やっぱりだいふ辛そうですななどと言われる心配がないから。

そんなことを考えて、ふと思いついた。昔まだ少年課にいたころに補導した、万引常習犯の少女のことだった。語弊のある言い方ではあるが、腕のいい女の子だった。仲間の密告がなければ、まず捕まることなどなかったろう。若者向けの高級ブランド専門に荒稼ぎをしていた彼女は、しかし、人前で盗んだ洋服を身につけることはなかった。売り飛ばすわけでもなかった。かといって、足がつくのを恐れたわけではない。自宅の自室で、ドアに鍵をかけ、誰の目にも触れる恐れがないようにして、大きな姿見の前に立ち、とつかえひつかえ着てみるのだ。あれこれとコーディネートを工夫し、洋服だけではなく時計やアクセサリーまできちんと組み合わせ、ファッション雑誌のモデルのように着飾ってポーズをとる。ただ姿見の前だけで。そこなら、似合わないねと言われる心配がないから。そして、表を歩くときは、いつも、膝の出かかったジーンズをはいていた。

誰もいないところでだけ、自己主張をする。負い目があるとそうなるのだと、悟ったような気がした。あの娘は今どうしているだろう。もう二十年近く昔の話だ。下手をすると、当時の彼女ぐらいの子供の母親になっているかもしれない。押し黙ったままの彼女に説教を垂れようとして、言葉の接穂さえうまく見つけることができなかつた新米の刑事の顔など、とつくに忘れているだろうが。

ぼうつと物思いをしているあいだにも、雨は降り続いていた。雨足が激しくなる様子はないが、電車のドアに降りかかる雨滴は大粒で、見るからに冷たそうだった。車窓の外を流れてゆく町並みも、低く垂れこめた雲の下で、寒さに首を縮めているようだ。

面白いもので、これが雪になってしまうと、薄汚れた町並みが、白い綿にくるまれて、かえって暖かそうに見えたりする。そういう感覚は、本物の雪の怖さを知らない関東人だけのものだ。昔、千鶴子に笑われたことがあつたが、本間にはどうしてもそう思える。今でも、雪が積もるほどに降れば、やっぱりそう感じるだろう。

亀有の駅に着くと、数人の乗客が乗りこんできた。四、五人連れの中年の婦人客が、本間の傍らを、固まってどやどやと通りすぎてゆく。ぶつからないようにと少し身体の向きを変えた。だが、それだけのために、傘を杖代わりに突っ張って、左足に体重がかからないようにしたとき、自分では意識しないうちに唸っていたらしい。話に興じていた女子高生たちが、ちらりとこちらに目をやった。(あのおじさん、ヘンね)とても思われたのかもしれない。

中川を渡るとき、左手にそびえる三菱製紙の工場の紅白に塗り分けられた煙突から、真っ白な煙があがっているのが見えた。煙突が吐き出す工場の吐息も、季節と気温にしたがつて、人間のそれと同じように色合いを変えるのだ。ひよつとすると、みぞれから雪になるかもしれないな、と思った。

金町駅で降りるときが、また一苦労だった。こういう状態になってみて初めて、公共交通機関は、シルバースhirtなどという亡国ものの制度を設けるのではなく、老人や身体障害者専用の車両をこそつくるべきだと実感した。そうしてくれば、乗り降りするとき、他の乗客とぶつかったりする心配もない。その車両では、ドアの開閉もゆっくりやってほしい。あわないで済むように。

意地を張った報いで、駅の階段を降りることが、ほとんど拷問のように感じられた。結局、駅から家までの道程には、タクシーを使うことになりそうだ。馬鹿馬鹿しいが、笑っている余裕はなかつた。気を抜くと、雨に濡れたコンコースで傘の先端が滑り、転んでしまいそうだった。

タクシー乗り場から、水元公園の南側にある公団住宅までは、車ならほんの五分ほどの距離だ。う溜りの釣堀の脇を通りすぎるとき、この寒さのなかでも、防寒着とベストを着込んで釣り糸を垂れている男の姿を見かけ、急に自分がひどく老いこんでしまったような気分になった。

エレベーターで三階の共同廊下へあがるとすぐに、東端の自宅の部屋のドアを開けて、智が立っているのが見えた。タクシーが着くのを、上から見ていたらしい。

「遅かったね」と言いながら近寄ってきた。手を貸してくれようとしたが、「大丈夫だよ」と言つてやった。息子はまだ十歳だ。もたれて歩くには小さすぎる。転べば二人で怪我がする。それでも、智は両手を広げて構え、父親が倒れかかってきたらすぐにでも受け止めようという姿勢で、ゆっくりと横歩きをしていた。

智に代わつて、今度は井坂恒男いさかつねおがドアを押さえてくれている。勢ぞろいでお出迎えかと思うと、苦笑の気分だった。

「お疲れでした」と、井坂は言った。「途中から降り出したんで、気をもみましたよ。どうして傘をささないんです？」

「穴が開いてるんですよ」

傘の先端で床を突つ張りながら入り口を抜け、本間は答えた。

「ボロ傘で。だから杖の代わりにしか使えない」

「ははあ」

半白の髪に、小柄こがらで小太りの身体、それによく似合うエプロン姿で、井坂は肩を貸してくれた。

「杖を買うなんて、もったいないでしょう。どうせすぐ要らなくなる」

「なるほど」

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。